泉鏡花作品集

第一卷

泉鏡花作品集

第一

創元社

泉鏡花作品集　第一卷

定價　一八〇圓
地方定價　一八五圓

著者　泉鏡花

發行者　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四　小林茂

印刷者　東京都文京區春日町三ノ四　猪瀬英一

發行所　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四（大阪市北區樋上町四五）　株式會社　創元社

電話茅場町（66）二〇六四・四〇八三・一七三四
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

昭和二十六年十月十五日　初版發行
昭和二十七年十二月五日　再版發行

乱丁落丁本がありましたら取替へます

目次

義血俠血……二
夜行巡査……毛
外科室……四八
照葉狂言……毛
笈摺草紙……一三
通夜物語……一四
解說……鏑木清方

短篇集

(一)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

義血俠血

一

越中高岡より倶利伽羅下の建場なる石動まで、四里八町が間を定時發の乘合馬車あり。

賃錢の廉きが故に、旅客は大抵人力車を捨てて之に便りぬ。車夫は其不景氣を馬車會社に怨みて、人と馬との軋轢漸く太甚きも、才に顏役の調和に因りて、營業上相干さざるを裝へども、折に觸れては紛亂を生ずること屢なりき。

七月八日の朝、一番發の馬車は乘合を揃へむとて、奴は其門前に鈴を打振りつゝ、

「馬車は如何です。無茶に廉くッて、腕車よりお疾うございい。さあお乘なさい。直に出ますよ。」

甲走る聲は鈴の音よりも高く、靜なる朝の街に響渡れり。通過の婀娜者は歩を停めて、

「一寸小僧さん、石動まで若干金？　なに十錢だとえ。ふう、廉いね。其代り遲いだらう。」

澤庵を洗立てたるやうに色揚したる編片の古帽子の下より、奴は猿眼を晃かして、

「物は可試だ。まあ御召しなすッて下さい。腕車より遲かッたら代は戴きません。」

恁言ふ間も渠の手なる鈴は絶えず噪ぎぬ。

「そんな立派なことを云ッて、屹度だね。」

奴は呆然として、

「虚言と坊主の髪は、いッた事はありません。」

「何だね、洒落臭い。」

微笑みつゝ女子は恁く言捨てて乘込みたり。

其年紀は二十三四、姿は强ひて滿開の花の色を洗ひて、清楚たる葉櫻の綠淺し。色白く。鼻筋通り、眉に力味ありて、眼色に幾分の凄味を帶び、見るだに涼しき美人なり。

是果して何者なるか。髪は櫛卷に束ねて、素顏を自慢に胭脂のみを點したり。服裝は、將棊の駒を大形に散したる紺縮の浴衣に、唐繻子と繻珍の晝夜帶をば緩く引掛に結び

て、空色縮緬の蹴出を微露し、素足に吾妻下駄、絹張の日傘に更紗の小包を持添へたり。

舉止俠にして、人を怯れざる氣色は、世慣れ、場慣れて、一條繩の繫ぐべからざる魂を表せり。想ふに渠が雪の如き膚には、割青淋漓として、惡龍焔を吐くにあらざれば、寡くも、其左の腕には雙枕に偕老の名や刻みたるべし。

馬車は此怪しき美人を以て滿員となれり。發車の號令は割るゝばかりに姑く響けり。向者より待合所の緣に倚りて、一篇の書を繙ける二十四五の壯佼あり。育縞の腹掛、股引に汚れたる白小倉の背廣を着て、護謨の解れたる深靴を穿き、鍔廣なる麥稈帽子を阿彌陀に被りて、踏跨ぎたる膝の間に、茶褐色なる渦毛の犬の太く逞きを容れて、其頭を撫でつゝ、專念に書見したりしが、此時鈴の音を聞くと齊しく身を起して、飄然と御者臺に乘移れり。

渠の形軀は貴公子の如く華車に、態度は森嚴にして、其裡自から活潑の氣を含めり。陋げに日に黧みたる面も熟視れば、清嘘明眉、相貌秀でて尋常ならず。畢竟は馬蹄の塵に塗れて鞭を揚るの輩にあらざるなり。

御者は書卷を腹掛の衣兜に收め、革紐を附けたる竹根の鞭を執りて、徐に手綱を捌きつゝ身構ふる時、一輛の人力車ありて南より來り、疾風の如く馬車の側を掠めて、瞬く間に一點の黑影となり畢んぬ。

美人は之を望みて、

「おい小僧さん、腕車より遲いぢやないか。」

奴の未だ答へざるに先ちて、御者は屹と面を抗げ、微になれる車の影を見送りて、

「吉公、手前また腕車より疾えといつたな。」

奴は愛嬌好く頭を掻きて、

「應、言つた。でも然う言はねえと乘らねえもの。」

御者は默して頷きぬ。忽ち鞭の鳴ると共に、二頭の馬は高く嘶きて一文字に跳出せり。不意を吃ひたる乘合は、座に堪らずして殆ど轉墜ちなむとせり。奔馬は中を駈けて、見る〳〵腕車を乘越したり。御者はやがて馬の足掻を緩め、渠に先を越させぬまでに徐々として進行しつ。

車夫は必死となりて、やはか後れじと焦れども、馬車は恰是月を負ひたる白家の影の如く、一歩を進むる毎に一歩を進めて、追へども〳〵先じ難く、やう〳〵力衰へ、息逼りて、今や殆れぬべく覺ゆる比、高岡より一里を隔る立野の驛に來りぬ。

此街道の車夫は組合に設けて、建場〳〵に連絡を通ずるが故に、今此車夫が馬車に後れて、喘ぎ喘ぎ走るを見るより、其處に客待せる夥間の一人は、手に唾して躍り出で、

「おい、兄弟しつかりしなよ。馬車の畜生如何してくれう。」

矢庭に對曳の綱を梶棒に投懸くれば、疲れたる車夫は勢を得て、
「難有え！　頼むよ。」
「合點だい！」
それと云ふまゝ挽出せり。二人の車夫は勇ましく相呼び相應へつゝ、卒に驚くべき速力をもて走りぬ。やがて町盡頭の狹く急なる曲角を爭ふと見えたりしが、人力車は無二無三に突進して遂に一歩を抽きけり。
車夫は諸聲に凱歌を揚げ、勢に乘じて二歩を抽き、三歩を抽き、益々馳せて、輕迅丸の跳るが如く二三間を先じたり。
向者は腕車を流眄に見て、最も揚々たりし乘合の一人は、「さあ、やられた！」と身を悶えて蹶げば、車中いづれも同感の色を動して、力瘤を握るもあり、地蹈韡を踏むもあり、奴を叱して切りに喇叭を吹かしむるもあり。御者は縱横に鞭を揮ひて、激しく手綱を搔繰れば、馬背の流汗滂沱として掬すべく、轡頭に噛出したる白泡は木綿の一袋もありぬべし。
有恁ほどに車體は一上一下と動搖して、我は頓挫し、或は傾斜し、唯是風の落葉を捲き、早瀨の浮木を弄ぶに異ならず。乘合は前後に俯仰し、左右に頽れて、片時も安き心は無く、今にも此車顚覆か、但は其身投落さるゝか。孰も怪我は免れぬ所と、老いたるは震慄き、若きは凝瞳になりて、唯一秒の後を危めり。
七八町を競走して、幸に別條無く、馬車は辛くも人力車を追抽きぬ。乘合は思はず手を拍ちて、車も撼くばかりに喝采せり。奴は凱歌の喇叭を吹鳴して、後れたる人力車を鹿きつゝ、踏段の上に躍れり。獨り御者のみは喜ぶ氣色も無く、意を注ぎて馬を勞り〳〵駈けさせたり。
怪しき美人は滿面に笑を含みて、起伏常ならざる席に安んずるを、隣なる老人は感に堪へて、
「お前樣どうもお強い。能く血の道が發りませんね。平氣なものだ、女丈夫だ。私なんぞは徹頭徹尾意氣地は無い。それも其理かい、もう五十八だもの。」
其言の訖らざるに、車は凸凹道を踏みて、がたくりんと跌きぬ。老夫は横樣に薙仆されて、半禿げたる法然頭はどつさりと美人の膝に枕せり。
「あれ、危い！」
と美人は其肩を聢と抱きぬ。
老夫は勃起々々身を擡げて、
「へい此は、此は如何も憚樣。さぞお痛うございましたらう。御免なすッて下さいましよ。いやはや、意氣地は有りません。これさ馬丁樣や、もし若い衆樣、何と顚覆るやうなことは無からうの。」

御者は見も返らず、勢籠めたる一鞭を加へて、
「分りません。馬が跌きや其迄でさ。」
老夫は眼を圓くして狼狽へぬ。
「否さ、轉ばぬ前の杖だよ。眞箇に御願だ、氣を着けておくれ。若い人と違つて年老の事だ、放り出されたら其迄だよ。もう好い加減にして、徐々とやつてもらはうぢやないか。何と皆樣如何でございます。」
「船に乘れば船頭任せ。此馬車にお乘なすつた以上は、私に任せたものとして、安心しなければなりません。」
「えゝ途方も無い。どうして安心がなるものか。」
呆れはてて老夫は呟けば、御者は始めて顧つ。
「それで安心が出來なけりや、御自分の脚で歩くです。』
「はい〳〵。それは御深切に。」
老夫は腹立しげに御者の面を偸視せり。
後れたる人力車は次の建場にて又一人を增して、後押を加へたれども、尙未だ逮ばざるより、車夫等は益々發憤して、悶ゆる折から、松並木の中途にて、前面より空車を挽來る二人の車夫に出會ひぬ。行違ひさまに、綱曳は血聲を振立て、
「後生だい、手を假してくんねえか。あの瓦多馬車の畜生、乘越さねえぢや、」
「此徒等の顏が立たねえんだ。」と他の一箇は叫べり。
血氣事を好む徒ば、應と云ふがまゝに其車を道端に棄てて、總勢五人の車夫は揉みに揉んで駈けたりければ、二三町ならずして敵に逐着き、有間は相並びて互に一歩を爭ひぬ。
爾時車夫は一齊に吶喊して馬を駭かせり。馬は慄えて躍り狂ひぬ。車は之が爲に傾斜して、將に乘合を振落さむとせり。
恐怖、叫喚、騷擾、地震に於ける慘狀は馬車の中に顯れたり。冷々然たるは獨彼怪しき美人のみ。
一身を我に任せよと言ひし御者は、風波に掀飜せらるゝ汽船の、やがて千尋の底に汨沒せむずる危急に際して、蒸氣機關は猶淙々たる穩波を截ると異らざる精神を以て、其職を竭すが如く、從容として手綱を操り、競走者に後れず前まず、隙だにあらば一躍して乘越さむと、脫合ひつゝ推行く狀は、此道堪能の達者と覺しく、最頼しく見えたりき。
然れども危急の際此頼しさを見たりしは、才に件の美人あるのみなり。他は皆見苦しくも慌て忙ぎて、數多の神と佛とは心々に禱られき。なほ彼美人は此騷擾の間、終始御者の樣子を打瞶りたり。
恁て六箇の車輪は恰も同一の軸に在りて轉する如く、兩兩相並びて福岡といふに着けり。此處に馬車の休憩所あり

て、馬に飲ひ、客に茶を賣るを例とすれども、今日ばかりは素通なるべし、と乘合は心々に想ひぬ。

御者は此店頭に馬を駐めてけり。我物得つと、車夫は遽に勢を增して、手を揮り、聲を揚げ、思ふまゝに侮辱して駈去りぬ。

乘合は切齒をしつゝ見送りたりしに、車は遠く一團の砂煙に裹まれて、遂に眼界の外に失はれき。

旅商人體の男は最も苛ちて、

「何と皆樣、業肚ぢやございませんか。大人氣の無い譯だけれど、かういふ行懸になつて見ると、如何も負けるのは殘念だ。おい、馬丁樣、早く行つてくれたまへな。」

「それも然うですけれどもな、老者は誠にはや如何も。第一この痼に障りますのでな。」

と遠慮勝に訴ふるは、美人の膝枕せし老夫なり。馬は群る蠅と虻との中に優々と水飲み、奴は木蔭の床几に大字形に偃れて、むしや〳〵と菓子を吃へり。御者は框に息ひて卷莨を燻しつゝ茶店の嘆と語りぬ。

「こりや急に出さうもない。」と一人が呟けば、田舍女房と見えたるが其前面に居て、

「憎々しく落着いてるぢやありませんかね。」

最初の發言者は益々堪へかねて、

「時に皆樣、彼通り御者も骨を折りましたんですから、御互樣に多少酒手を奮みまして、最一骨折つてもらはうぢやございませんか。何卒御賛成を願ひます。」

渠は直に帶佩の纍口を取出して、中なる錢を撈りつゝ、

「ねえ貴下、茲で如彼惰られてしまつた日には、佛造つて魂入れずでさ、冗談ぢやない。」

やがて銅貨三錢を以て隗より始めつ。帽子を脫ぎて其中に入れたるを、衆人の前に差出して、渠は普く義捐を募れり。

或は勇んで躍込みたる白銅あり。或は澁々捨てられたる五厘もあり。此處の一錢、彼處の二錢、積りて十六錢五厘とぞなりにける。

美人は片隅に在りて、應募の最終なりき。隗の帽子は巡回して渠の前に着せる時、世話人は辭を卑うして挨拶せり。

「飛んだお附合で、どうも御氣毒樣でございます。」

美人は輕く會釋すると與に、其手は帶の間に入りぬ。小菊にて上包せる緋鹽瀨の紙入を開さて、渠は無雜作に半圓銀貨を投出せり。

餘所目に瞥たる老夫は太く驚きて面を背けぬ、世話人は頭を搔きて、

「いや、これは剩錢が足りない。私も生憎小いのが……」

と腰なる纍口に手を掛くれば、

「いゝえ、不要んですよ。」
世話人は呆れて叫びぬ。
「此だけ？　五十錢！」
之を聞けう乗合は、然無きだに、何者なるか、怪しき別品と目を着けたりしに、今此散財の婦女子に似氣無きより、彌々底氣味悪く訝れり。
世話人は帽子を揺動して錢を鳴しつゝ、
「メて金六十六錢と五厘！　大したことになりました。これなら馬は駈けますぜ。」
御者は既に着席して出發の用意せり。世話人は酒手を紙に包みて持行きつ。
「おい、若い衆さん、これは皆様からの酒手だよ。六十六錢と五厘あるのだ。何分一つ奮發してね。頼むよ。」
渠は氣輕に御者の肩を拊さて、
「隊長、一晩遊べるぜ。」
御者は流肝に紙包を見遣りて空嘯きぬ。
「酒手で馬は動きません。」
僅に五錢六厘を懐にせる奴は驚き且惜みて、有意的に御者の面を眺めたり。好意を無にせられたる世話人は腹立ちて、
「折角皆様が下さるといふのに、それぢや不要んだね。」
車は徐々として進行せり。

「戴く因縁がありませんから。」
「そんな生意氣なことを言ふもんぢやない。骨折賃だ。まあ野暮を云はずに取ときたまへてことさ。」
六十六錢五厘は將に御者の衣兜に闖入せむとせり。渠は固く拒みて、
「思召は難有うございますが、規定の賃錢の外に骨折賃を戴く理由がございません。」
世話人は推返されたる紙包を持扱ひつゝ、
「理由も糸瓜もあるものかな。御客が與るといふんだから、取つといたら可いぢやないか。かういふ物を貰つて濟ないと思つたら、一骨折つて今の腕車を抽いてくれたまへな。」
「酒手なんぞは戴かなくッても、十分骨は折ってるです。」
世話人は冷笑ひぬ。
「そんな立派な口を吐いたつて、約束が違や世話は無え。」
御者は屹と振顧りて、
「何ですと？」
「此馬車は腕車より迅いといふ約束だぜ。」
儼然として御者は答へぬ。
「そんな御約束はしません。」
「おッと然うは言はせない。なるほど私達には爲なかつたが、此姉様には如何だい。六十六錢五厘の内、一人で五十

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

錢の酒手をお出しなすつたのは此の方だよ。あの腕車より迅く行つてもらはうと思やこそ、かうして莫大な酒手も奮まうといふのだ。如何だ、先生、恐入つたか。」

鼻蠢かして世話人は御者の背を指もて撞きぬ。渠は一言を發せず、世話人は頗る得意なりき。美人は戲るゝが如くに詰れり。

「馬丁様、眞箇に約束だよ、如何したッてんだね。」

仍渠は緘默せり。其唇を鼓動すべき力は、渠の兩腕に奮ひて、馬蹄忽ち高く擧れば、車輪は其輻の見るべからざるまでに快轉せり。乘合は再び地上の溺に溺れて、浮沈の憂目に遭ひぬ。

縱聽五分間の後、前途遥に競走者の影を認得たり。然れども時遲れたれば、容易に追迫すべくもあらざりき、而して到着地なる石動は最早間近になれり。今にして一躍の下に乘越さずんば、終に失敗を取らざるを得ざる可きなり。憐むべし過度の馳驀に疲れ果てたる馬は、力無げに俛れたる首を聯べて、策てども走れども、足は重りて地を離れかねたりき。

何思ひけむ、御者は地上に下立ちたり。乘合は箇却甚麼と見る間に、渠は手早く一頭の馬を解放ちて、

「姉様濟みませんが、一寸下りて下さい。」

乘合は顏を見合せて、此謎を解くに苦めり。美人は渠の言ふがまゝに車を下れば、

「どうか此方へ。」と御者はおのれの立てる馬の側に招きぬ。美人は益々其意を得ざれども、仍渠の言ふがまゝに進寄りぬ。御者は物をも言はず美人を引抱へて、蹤然と馬に跨りたり。

魂消たるは乘合なり。乘合は實に魂消たるなり。渠等は千體佛の如く面を鳩め、呆然惘然と頤を垂れて、恐らくは畫にも觀るべからざる此不思議の爲體に眼を奪はれたりしに、其馬は奇怪なる御者と、奇怪なる美人と、奇怪なる擧動とを載せて驀直に馳去りぬ。車上の見物は漸く我に復りて響動めり。

「一體如何したんでせう。」

「まづ乘せ逃とでもいふんでせう。」

「へえ、何でございます。」

「客の逃げたのが乘逃。御者の方で逃げたのだから乘せ逃でせう。」

例の老夫は頭を掉り〳〵呟けり。

「いや洒落どころか。こりや、まあ如何してくれる積だ。」

不審の眉を攢めたる前世話人は、腕を拱きつゝ座中を眴して、

「皆様、何と思召す？　こりや尋常事ぢやありませんぜ。馬鹿を見たのは我々ですよ。全く駈落ですな。どうも彼女

がさ、尋常の風ぢやあんめえと脱んで置きましたが、こりやあ正に然うだつた。然し好い女だ。」
「私は急ぎの用を抱へてゐる身だから、かうして安閑としては居られない。何と此小僧に頼んで、一匹の馬で遣つてもらはうぢやございませんか。馬鹿々々しい、錢を出して、あの醜態を見せられて、置去を吃ふ奴も無いものだ。」
「全く然うでございますよ。眞箇に巫山戯た眞似をする野郎だ。小僧早く遣つてくんな。」
奴は途方に暮れて、曩より車の前後に出沒したりしが、
「どうも御氣毒樣です。」
「御氣毒樣は知れてらあ。何時まで恁うして置くんだ。早く遣つてくれ、遣つてくれ！」
「私には未だ能く馬が動きません。」
「活きてるものの動かないといふ法があるものか。」
「臀部を引撲け／＼。」
奴は苦笑しつゝ、
「そんな事を云つたツて可けません。二頭曳の車ですから、馬が一匹ぢや遣切れません。」
「そんなら此處で下りるから錢を返してくれ。」
腹立つ者、無理言ふ者、呟く者、罵る者、迷惑せる者、乘合の不平は奴の一身に湊れり。渠は散々に苛まれて遂に涙ぐみ、身の措所に窮して、辛くも車の後に竦みたりき。乘合は益々躁ぎて、敵手無き喧嘩に狂ひぬ。
御者は眞一文字に馬を飛して、雲を霞と走りければ、美人は魂身に添はず、目を閉ぢ、息を凝し、五體を縮めて、力の限り渠の腰に縋りつ。風は颼々と兩腋に起りて毛髮竪ち、道は宛然河の如く、濁流脚下に奔注して、身は是虚空を轉ぶに似たり。
渠は實に死すべしと念ひぬ。次第に風歇み、馬駐ると覺えて、直ちに昏倒して正氣を失ひぬ。是御者が靜に馬より扶下して、茶店の座敷に舁入れたりし時なり。渠は此介抱を主の嫗に囑みて、其身は息をも繼かず再び贏馬に策ちて、舊來し路を急ぎけり。
程無く美人は醒めて、こは石動の棒端なるを覺りぬ。御者は既に在らず。渠は其名を嫗に訊ねて、金樣なるを知りぬ。其爲人を問へば、方正謹嚴、其行を質せば學問好。

二

金澤なる淺野川の磧は、宵々毎に納涼の人出の爲に熱了せられぬ。此節を機として、諸國より入込みたる野師等は、磧も狹しと見世物小屋を掛聯ねて、猿芝居、娘輕業、山雀の藝當、劍の刃渡、活人形、名所の覗機關、電氣手品、盲人相撲、評判の大蛇、天狗の骸骨、手無娘、子供の玉乘等一々數ふるに遑あらず。

就中大評判、大當は、龍の白絲が水藝なり。太夫龍の白絲は妙齡十八九の別品にて、其技藝は容色と相稱ひて、市中の人氣山の如し。然れば他は皆晩景の開場なるに拘らず。是のみ獨り晝夜二回の興行ともに、其大入は永當たり。

時正に午後一時、擊柝一聲、囃子は鳴を潜むる時、口上人渠が所謂不辯舌なる辯を揮ひて前口上を陳ずれば、忽ち起る緩紋朗笛の節を履みて、靜々歩出でたるは、當座の太夫元龍の白絲、高島田に奴元結掛けて、脂粉濃に桃花の媚を粧ひ、朱鷺色縮緬の單衣に、銀絲の浪の刺繍ある水色紹の社衿を着けたり。渠は閑雅に舞臺好き所に進みて、一禮を施せば、待構へたりし見物は聲聲に喚きぬ。

「いよう、待つてました大明神様！」

「妖艶々々！」

「よう〳〵金澤暴し！」

「こゝな命取！」

喝采の聲の裡に渠は徐に面を擡げて、情を含みて淺笑せり。口上は扇を擧げて一咳し、

「東西！　お目通に控へさせましたるは、當座の太夫元龍の白絲に御座りまする。御目見相濟みますれば、早速ながら本藝に取掛らせまする。最初腕調として御覽に入れまするは、露に蝶の狂ひを象りまして、（花野の曙）。ありや來た、よいよいよい扨。」

扨太夫は盈々〳〵水を盛りたる玻璃盞を左手に把りて、右手には黄白二面の扇子を開き、呀と聲發けて交互に投上れば、露を爭ふ蝶一雙、縱横上下に逐ひつ、逐れつ、雫も滴さず翼も息めず、太夫の手にも住まらで、空に文織る練磨の手術、今ぞや〳〵と、木戸番は濁聲高く喚はりつゝ、外面の幕を引揚げたる時、演藝中の太夫は不圖外方に眼を遣りたりしに、何にか心を奪はれけむ、磕と玻璃盞を取落せり。

口上は狼狽して走寄りぬ。見物は其爲損じを哄と囃しぬ。太夫は受住めたる扇を手にしたるまま、其瞳を仍外方に凝しつゝ、つか〳〵と土間に下りたり。

口上は彌々狼狽して、爲ん方を知らざりき。見物は呆れ果てて息を嚥め、滿場齊く頭を回して太夫の擧動を打瞶れり。

白絲は群居る客を推排け、掻排け、

「御免あそばせ、一寸御免あそばせ。」

倉皇木戸口に走出で、項を延べて目送せり。其視線中に御者體の壯佼あり。

何事や起りたると、見物は白絲の踵より、どろ〳〵と亂出づる喧擾に、件の男は振返りぬ。白絲は始めて其面を見るを得たり。渠は色白く瀟洒なりき。

「おや、蓮つてた！」

恁く獨語ちて、太夫は悄然木戸を入りぬ。

三

夜は既に十一時に近きぬ。磧は凄涼として一箇の人影を見ず、天高く、露氣冷に、月のみぞ獨澄めりける。

熱鬧を極めたりし露店は盡く形を斂めて、止此處彼處に見世物小屋の板圍を洩るゝ燈火は、微に宵のほどの名殘を留めつ。河は長く流れて、向山の松風靜に度る處、天神橋の欄干に靠れて、うと〳〵と交睫む漢子あり。

渠は山に倚り、水に臨み、清風を擔ひ、明月を戴き、了然たる一身、蕭然たる四境、自然の清福を占領して、いと心地快げに見えたりき。

折から磧の小屋より顯れたる婀娜者あり。紺絞の首拔の浴衣を着て、赤毛布を引絡ひ、身を持餘したるが如くに歩を運び、下駄の爪頭に戛々と礫を蹴遣りつゝ、流に沿ひて逍遙たりしが、瑠璃色に澄み渡れる空を打仰ぎて、

「噫、好いお月夜だ。寢るには惜い。」

川風は颯と渠の鬢を吹亂せり。

「あゝ、薄ら寒くなッて來た。」

緊と毛布を絡ひて、渠は四邊を眴しぬ。

「人子一人居やしない。何だ。眞箇に、暑い時は囂々騒いで、涼しくなる時分には寢てしまふのか。ふゝ、人間といふものは意固地なもんだ。涼むんなら這麼樣時ぢやないか。どれ、橋の上へでも行つて見ようか。人さへ居なけりや、何處でも好い景色なもんだ。」

渠は再び徐々として歩を移せり。

此女は瀧の白絲なり。渠等の仲間は便宜上旅籠を取らずして小屋を家とせるもの寡からず。白絲も然なり。

軈て渠は橋に來りぬ。吾妻下駄の音は天地の寂默を破りて、からんころんと月に響けり。渠は其音の可愛に、猶强て響せつゝ、橋の央近く來れる時、矢庭に左手を抗げて其高髷を摑み、

「えゝもう重苦しい。ちよッ煩え！」

暴々しく引解きて、手早くぐる〳〵卷にせり。

「あゝ是で清々した。二十四にもなつて高島田に厚化粧でもあるまい。」

恁て白絲は水を聽き、月を望み、夜色の幽靜を賞して、漸く橋の半を過ぎぬ。渠は忽ち暢氣なる人の姿を認めぬ。何者か是、天地を枕衾として露下月前に快眠せる漢子は、數歩の内に在りて斟を立てつ。

「おや！　好い氣なものだよ。誰だい、新ぢやないか。」

囃子方に新といふ者あり。宵より出でて未だ小屋に還らざれば、其かと白絲は間近に寄りて、男の寢顏を覗きたり。

新は未だ如此暢氣ならざるなり。渠は果して新にはあら

ざりき。新の相貌は如此威儀あるものにあらざるなり。渠は千の新を合せて、猶且勝ること千の新なるべき異常の面魂なりき。

其眉は長く濃に、睡れる眸子も凛如として、正しく結びたる唇は、夢中も放心せざる渠が意氣の俊爽なるを語れり。漆の如き髪は稍生ひて、廣き額に垂れたるが、吹揚る川風に絶えず戰けり。熟視めたりし白絲は忽ち色を作して叫びぬ。

「あら、まあ！　金樣だよ。」

欄干に眠れるは是餘人ならず、例の乘合馬車の馭者なり。

「如何して今時分這麼樣所にねえ。」

渠は瓊音を忍びて、再び男に寄添ひつゝ、

「眞箇に罪の無い顏をして寢てゐるよ。」

恍惚として瞳を凝したりしが、卒におのれが絡ひし毛布を脫ぎて被懸けたれども、馭者は夢にも知らで熟睡せり。

白絲は欄干に腰を憩めて、有間爲す事もあらざりしが、突然聲を揚げて、

「えゝ太甚い蚊だ。」膝の邊を磕と拊てり。此音にや驚きけむ。馭者は眼覺まして、叭まじりに、

「あゝ、寢た。もう何時か知らん。」

思寄らざりし我側に媚めける聲ありて、

「もう彼此一時ですよ。」

馭者は愕然として顧れば、我肩に見覺えぬ毛布ありて、深夜の寒を護れり。

「や、毛布を着せて下すッたのは？　貴方？でございますか。」

白絲は微笑を含みて、呆れたる馭者の面を視つゝ、

「夜露に打たれると體の毒ですよ。」

馭者は默して一禮せり。白絲は嬉げに身を進めて、

「貴方、其後は御機嫌よう。」

愈々呆れたる馭者は少く身を退りて、假初ながら、狐狸變化の物にはあらずやと心陰に疑へり。月を浴びて物凄きまで美しき女の顏を、無遠慮に打眺めたる渠の眼色は、顰める眉の下より異彩を放てり。

「何方でしたか、一向存じません。」

白絲は片頬笑みて、

「あれ、情無しだねえ。私は忘れやしないよ。」

「はてな。」と馭者は首を傾けたり。

「金樣。」と女は馴々しく呼びかけぬ。

馭者は太く驚けり。月下の美人生面にして我名を識る。馭者たる者誰か驚かざらむや。渠は實に未だ曾て信ぜざりし狐狸の類にはあらずや、と心始めて惑ひぬ。

「お前樣は餘程情無しだよ。自分の抱いた女を忘れるなんといふ事があるものかね。」

「抱いた？　私が？」
「あゝ、お前様に抱れたのさ。」
「何處で？」
「好い所で！」
袖を掩ひて白絲は嫣然一笑せり。
馭者は深く思案に暮れたりしが、やう〳〵傾けし首を正して言へり。
「抱いた記憶はないが、成程何處かで見たやうだ。」
「見たやうだも無いもんだ。高岡から馬車に乘つた時、人力車と競走をして、石動手前からお前様に抱れて、馬上の合乘をした女さ。」
「應！　然だ。」横手を拍ちて、馭者は大聲を發せり、白絲は其聲に驚かされて、
「えゝ吃驚した。ねえお前様、覺えて御在だらう。」
「うむ、覺えとる。然だッた、然だッた。」
馭者は唇邊に微笑を浮べて、再び横手を拍てり。
「でも言れるまで憶出さないなんざあ、餘り不實過ぎるのねえ。」
「いや、不實といふ譯では無いけれど、毎日何十人といふ客の顔を、一々覺えてゐられるものではない。」
「其は御尤さ。然だけれども、馬上の合乘をするお客は毎日はありますまい。」
「那麼樣事が毎日有られて耐るものか。」
二人は相見て笑ひぬ。時に數杵の鐘聲遠く響きて、月は益々白く、空は益々澄めり。
白絲は更めて馭者に向ひ、
「お前様、金澤へは何日、如何して御出なすッたの？」
四顧寥廓として、止山水と明月とあるのみ。風戾たる天風は徐々に馭者の毛布を飄せり。
「實は彼地を浪人してね……」
「おやまあ、如何して？」
「之も君ゆゑさ。」と笑へば、
「御冗談もんだよ。」と白絲は流眄に見遣りぬ。
「いや、其は左も右も、話說を爲んけりや解らん。」
馭者は懷裡を搜りて、油紙の蒲簟莨入を取出し、急遽一服を喫して、直に物語の端を發かむとせり。白絲は渠が吸殼を擊くを待ちて、
「濟みませんが、一服貸して下さいな。」
馭者は言下に莨入と燐枝とを手渡して、
「煙管が甕ッてます。」
「いゝえ、結構。」
白絲は一吃を試みぬ。果して其言の如く、煙管は不快き脂の音のみして、煙の通ふこと縷より微なり。
「なるほど之は甕ッてる。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.